かつおきんや作品集

へそ取り徳平

おきんや作品集18

へそ取り徳平

偕成社

かつおきんや作品集 18

へそ取り徳平

NDC 913　　偕成社　254p　21cm　1983年

発行　1983年2月　初版第1刷

著者　かつおきんや

発行者　今村廣

発行所　株式会社偕成社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話(03)260－3229 振替 東京5-1352番

印刷　新興印刷・小宮山印刷／製本　文勇堂製本

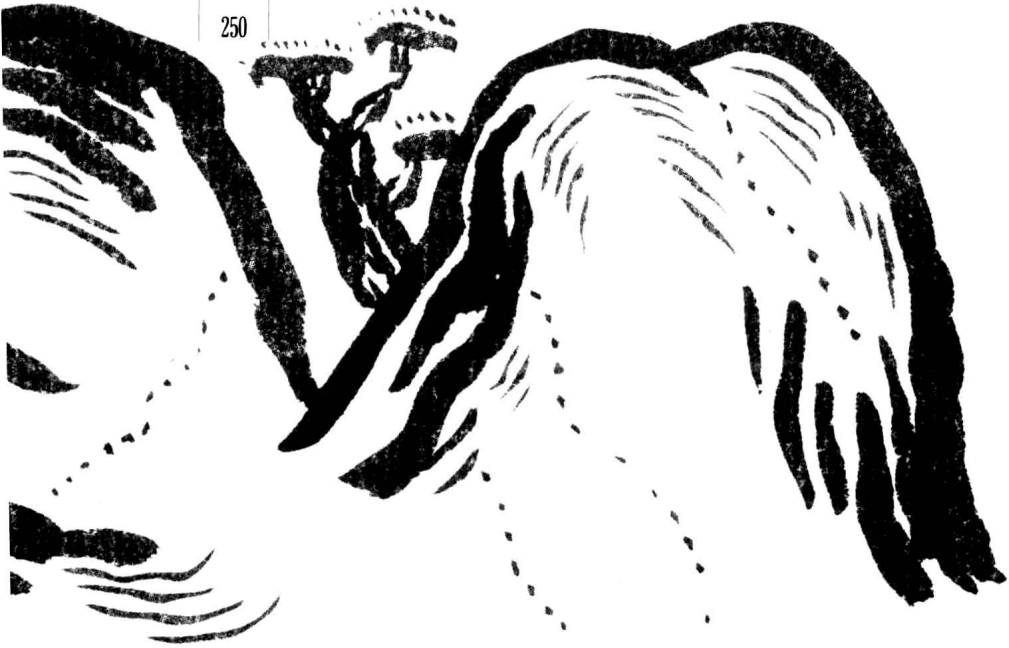
ISBN4-03-737180-4
©かつおきんや　梶山俊夫　1983

Printed in Japan　落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

へそ取り徳平／もくじ

へそ取り徳平　5
次郎のたいこ　31
よめどん、めれたや　71
五左衛門じいと山伏　99
橋立のムジナ退治　145
梅翁だぬき　175
タアとちい　197
あとがき　249
優しさと内に秘めた激しさと〈解説〉＝松谷みよ子　250

装丁／司　修
カバー絵・さし絵／梶山俊夫



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

著者・**かつお きんや**（勝尾 金弥）
1927年、金沢市に生まれる。金沢大学卒業後中学校教師を経て、現在、愛知県立大学助教授。日本児童文学者協会会員。北陸児童文学会の中心メンバーとしても活躍中。多年郷土史とくに江戸末期の庶民の生活や闘争を研究し、その面での著書が多い。『天保の人びと』（サンケイ児童出版文化賞）『七つばなし百万石』（日本児童文学者協会賞）等多数を本作品集に収録する。住所／金沢市笠舞1－19－22

画家・**梶山 俊夫**（かじやま としお）
1935年、東京に生まれる。62年、シェル美術賞受賞。独得の風格ある作品によって児童書・絵本に活躍。72年、世界絵本原画展（チェコ）ゴールデンアップル賞受賞。作品は『うまおいどり』『向こう横町のおいなりさん』『梶山俊夫絵本帖』『ゆっくらゆっくらよたよた』等多数がある。住所／市川市中山2－7－20

装丁・**司　　修**（つかさ　おさむ）
1936年、群馬県に生まれる。主体美術協会会員。タブローのほか種々の技法を駆使し華麗典雅な装丁・さし絵・絵本製作者として定評がある。著書『風船乗りの夢』画集『コラージュ』絵本『はずかしがりやのぞう』『恋人たち』『ひかりのゆびわ』『魔女の森』『おとうさんだいすき』等多数がある。住所／武蔵村山市岸109

へそ取り徳平（とくべえ）

昔、あるところに、徳平というて、それはもう元気のよい男の子がおったと。
夏のことやった。とうとは、炭焼きに山へいっとった。かあかは山の畑へ出かけた。
「雨ふらんかのう。里のほうでもよわっとるやろうが……」
というて、青い空をあおぎ、徳平をギュッとにらんで、
「徳平。あそんでばっかりおらんと、ちゃんとしごとしとろうぞ。」
といいのこして、出かけていった。
「わかった、わかった。」
わざとでかい声をだして徳平は返事をしたが、かごを背おったかあかのうしろすがたが、立ちならぶ杉林のふとい幹のかげにかくれてしまうと、さっそく、すこし下のほうにある、三吉の家へかけつけた。
「おーい。三吉やい。」
三べんよんだら、やっと、歯ぬけばあばがよろよろと出てきて、かなしげな顔つきで、
「三吉はな、よんべ（ゆうべ）から、ドス腹いとうて、ねとるわいの。」
というた。
あそび相手の三吉がおらんでは、どうしようもない。

「ええい。三吉のかいしょなし、しょんべんたれ、おっちょこちょい、ろくでなし、死んでしもえ。」

いいたいだけいうと、すっとした。それで家へもどると、庭さきで、いいつけられてあったまきわりを、しかたなしにやりだした。山の子どもは、七つ八つでもしごとをせんならんことになっておる。まして徳平は十歳や。

なたをふりあげると、かけ声かけてはふりおろいた。

「えーい、この、がにまため。」

「えーい、この、ぼたもちめ。」

「えーい、この、犬ころめ。」

「えーい、この、ひょっとこめ。」

「えーい、この、いもちゃけ（かまきり）め。」

徳平の家は、山がななめにおりてきて、ふかい谷にきりたつ、そのきわにひっついている。せまい庭のすぐさきは、すこし杉やアテ（アスナロ）の木もはえてはいるけれど、まっすぐ谷川へおちるがけや。ときどき、サーッとつめたい風が、谷の下からふきあげてくる。

しばらく、まきをわるうちに、汗がながれだしてきた。谷の下からふきあげてくる風も、ときどき思いだしたようにふくだけで、それも水がすくないせいか、ちっともすずしゅうない。

徳平は、さらしの袖なし一まいだけのかっこうやけど、それさえもぬぎすてたくなってきた。

「えーい、むしあついなあ。ザーッと、ふりゃいいがになあ……」
「もう、いっぷくや、いっぷくや。」
なたをそのへんにほうりだし、家のよこへいって、かけいからチョロチョロとおちる水を両手でうけて、ゴクッゴクッとのんだ。
「あー、んまい。」
とおい山のおくでカッコウが鳴いておる。徳平は、家の入り口のわきにさがっておった、とうとのすげ笠を、ピョンととびついて、つつきおとした。そして、それをもって、がけのすぐそばまでくると、石に腰をおろし、両手ですげ笠をもちなおし、フワーリフワーリとあおった。
ちょっとなまぬるいけど、あおがれた顔は気もちよい。何べんか、あおいでいると、きゅうにあたりの木が、ザワザワと鳴りだした。
「おっ。風が出てきたぞ。もっとふけ、もっとふけ。」
徳平は、うれしくなって、右手ですげ笠を高くかかげ、大きく右へ左へかやぶきの家の屋根や、そのまわりの高い木をあおぐようにふった。
「そーれ、東の杉は、西へわたれ。西のヒノキは、東へとべ。」
せまい庭を、いったりきたり、大きくあおいで走りまわった。まるで、それにこたえるみたいに、風のいきおいは、みるみるつよくなり、ビュウッゴウゴウゴウ、ザザーッゴワゴワゴウ、やがて、くるくるまいだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ああっ。」
笠をとばされそうになった徳平は、むちゅうで左手をあげ、両手でつかんだ。それといっしょに、いちだんとつよい風が、谷のほうから、ヒョウヒョウヒューッとふきあげてきた。
両手ですげ笠をつかんだまま、徳平のからだは、ふわっと空にういた。びっくりしてつまさきをのばしたけれど、とどきもせん。なにかふとい綱でひきあげられるように、徳平は、笠にぶらさがったまま、ぐんぐん空をのぼりだした。
「こりゃ、なんや。どしたんやろう。」
さすがの徳平も、声がふるえた。そのあいだにも、まっすぐつりさげられたからだは、空をめがけて、休みなくのぼっていく。ヒュウヒュウと、耳のそばで風が鳴っている。
徳平はふと下を見た。みどりの山はだのなかに、徳平の家の屋根が小さく見える。あとは木ばかり。と、見るうちに、もう一けん屋根が見えた。
「あ、三吉の家や。おーい、三吉ようーっ。」
そのあいだも、ぐんぐんからだはあがる。谷川がほそい帯のように、いや、ひかっているからヘビのように見える。
「かあか……」
泣き声になった。しかし、手をはなしたらどうなるかわからない。なみだが出てきて、ほおをながれ、なにも見えなくなった。

そのうち、すこしずつ、あがるはやさがゆるやかになり、手や顔や、からだのまわりに、なにやら、やわらかい、あたたかい、ふわっとしたものがさわりだした。

のぼるはやさがゆるやかになると、こんどは、すこしずつ、ななめにのぼりだし、そのうちまっすぐよこにうごきだした。目がどうやら見えるようになり、手がだるくて、どうしようもなくなってきて、徳平は、笠を胸のまえへおろした。

からだはとまった。白いやわらかな雪の上に徳平は立っておった。雪といってもちっともつめたくないし、足首あたりまではうまっても、下はしっかりしていた。

「どこやろ、ここは。」

木もなかった。山もない。上を見ると、ぼんやりと青いだけで、なにもない。

それは雲の上やった。徳平は、すげ笠にぶらさがったまま、雲の上までふきあげられたのやった。

しかし、そんなところへはじめてきた徳平には、雲の上やら海の底やら、さっぱりわからん。きょろきょろあたりを見まわしておると、左のほうから、なにやら、あやしいやつがやってきた。青黒いからだをした、はだかの、でかい男や。

かみの毛はトンモロコシの毛みたいで、つのが二本はえておる！　目玉もまっ青、白いきばがニュッと口からのぞいておる。虎の皮のさるまたをはいて、手首にはヘビの腕輪をし、右手には

大きなしぶうちわをもち、左手では、背なかにかついだ大きなふくろの口をしっかりとにぎっておる。

「こいつは、青鬼やな。わしをつかまえて、くう気かな。」

そう思うておると、すこしてまえでとまったその鬼は、いきなりわらいだした。

「ゴッホッホッホ。なにをおどろいとるか、徳平。」

徳平は、名まえをよばれてびっくりした。

「おまえはだれや。ここはどこや。」

鬼は、白い歯をむきだして、またわろうた。

「ゴッホッホ。そんなこともわからんかい。わしをひと目見りゃ、わかるやろ。ここは雲の上、天上界。わしは、風の神、風神さまや。」

そこで徳平は、またきいた。

「風の神が、わしに、なんの用や。」

青黒い顔の風の神は、ちょっとふくれておる腹をヘコヘコさせて、またわろうた。

「ゴッホッホ。おまえは、わしに、もっとふけというた。それで、ここで、あそばしてやろうと思うて、わざわざよぼって（よんで）やったんじゃ。」

「ここであそぶんやと。そりゃおもしろい。すもうやろう。」

徳平がさっそく足をひろげて身がまえると、青鬼は、あわてて、頭をふった。

「ちごう、ちごう。わしがおまえみたい者とあそんどるひまがあるもんか。」
そして、うしろをひょいとふりむくと、
「おーい。人間の子どもがきたぞ。あそんでもらえや。」
とよぼった。すると、にわかに、ギャアギャア、グズグズ、声がして、小さな子どもたちがかけてきた。
どれもこれも、まるまるとふとった、はだかの男の子らで、小さな虎の皮のさるまたをして、ころがるようにやってくる。三つから五つ、せいぜい六つぐらいらしい。青っぽいのや、赤っぽいのや、白っぽいのや、いろいろいる。みなで、七、八人もいる。
「えーっ？　こんなねんねらちとあそべやと？」
すげ笠をおとしたのも気づかずに、徳平がその子らを見ているうちに、ワアワアとみなは徳平のまわりをとりかこんだ。
「あそぼ。」
「おい、あそべ。」
「はよ、あそぼ。なにする。」
そして、徳平の手やら、袖なしのすそやらを、かってにひっぱりだした。それを見て風の神は、すーっといってしまいそうになったので、徳平は、あわててどなった。
「やい、風の神、ひきょうやぞ、こんなねんねのお守りさせて。」

風の神は、顔だけこっちへむけて、ニヤニヤとわらっていて、とりあおうともせん。
「かえり道をおしえろ。そしたらあそんでやる。」
風の神は、
「あわてるな、あわてるな。ひとしごとすまいてもどってきたら、おしえてやるわい。」
とだけいうと、あっちをむいた。そのまま、大またに歩いていく。
「やい、まてーっ。」
徳平は追っかけようとしたが、小さな子どもがとりまいていて、一歩もうごけない。そのうちに、風の神のふくろを背おったうしろすがたは、すぐに見えなくなってしもうた。
「ちくしょう。ほんとにひきょうなやつやな。ふん、あそんでやるもんか。」
パッパッと手をふりほどき、袖なしのすそにつながっている子どもたちのおでこを、とーん、とーんと、つきはなした。子どもたちは、コロン、コロンとひっくりかえり、それがうれしいといっては、よろこんでおる。
「もういちど。」
「もういっぺん。」
徳平は、そういってせがむ子らに、思いきり、あかんべえをしてみせた。
「ふん。あっかんべえや。」
ところが子どもたちには、それがまたうれしい。いっせいによこにならぶと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com